



浄土真宗本願寺派 慈雲山龍溪寺 奏庵

2016.2.20 発行 kanadean No. 274

かなであん

249-0002 逗子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

http:// kanadean.net mail: ryukeiji@kanadean.net

癒しと励まし

人間、誰しも悩みを持っていません。すぐに忘れる認知症の人だって、いつもどこかしら不安であったり、悲しく感じることはなくならないでしょうし、今あなたも何らかの悩みを抱えておられることでしょう。

私は昨年のお盆過ぎから急激に体調を崩し、血液の癌・悪性リンパ腫と診断され、抗がん剤治療を開始して半年になろうとしています。腫瘍はほぼ消えましたが、腫瘍のあった位置が、呼吸や嚥下、声を掌る反回神経の片側を麻痺させ、声帯の方はなかなか改善されず「読経」が思うようにできません。僧侶の私には、癌という病より声が思うように出ないのがストレスで今の悩みです。

しかし、法事を勤めてきた息子が、「ご住職はいかがですか？」と聞かれ、「声が出なくなって「営業」ができないおかげで、やっと、清く貧しい本来のいい坊主に専念できています」と冗談を混じえて報告したら、出席していた方々が一斉に「素晴らしい」と言って拍手して下さいてありがたかったと話してくれ、癌すらも私や家族に僧侶としての本分を蘇らせ、癒しと励ましという力をくれていることに気づかされます。

* * *

何か問題が生じたときの解決

には、二つの方向性があります。一つは、対象や環境、相手を変えることによって解決しようとするやり方で、もう一つは、自分自身を変えるやり方です。

病気で言えば、その病気を完全に治癒させようとするのが前者の解決法ですが、このやり方は、いくら努力をしても叶わないことが多く成功率は高くありません。経済的な悩みでも、人間関係の悩みでも、この方向での解決を、仏教では愚策、愚かだと説いています。努力は悪いことではありません。道徳とは違って、報われないことも含めて努力であると教えるのが仏教です。仏教は、何も世界や相手を変えようともがく必要はない、自分自身が変わればいい…と教えています。この自分が変わることは、相手に合わすことではありません。相手を変えようとしている自分を変える（やめる）ということです。すなわち、相手がどうであろうとどうでもよい、そんなに気に入らない相手のことでジタバタしない自分になるということです。

* * *

面白い話があります。山伏が一休さんに、修験者が力の程度を競う験比（げんくらべ）を挑みます。まず、山伏はキャンキャン吠えている犬を呪文で黙らせようとしませんが、いくら唱えても鳴きやもうとしません。次は

一休さんです。彼は持っていたおにぎりを犬にやります。すると犬はたちまちおとなしくなりました。今度は燃えている火を消すことにしました。山伏は呪文をいくら唱えても火は消えません。一休さんは、その火にじゃ〜と小便を引っかけました。もちろん火はすぐに消えました。この話は何を気づかせようとしているのでしょうか。

先日も、除霊、開運をするという腕輪を高価で買わせるという詐欺に、護持に困窮する現存するお寺が加担しているという情けない事件がありましたが、詐欺にあった人は的外れな方法で悩みをなくし思いを叶えようと無駄なことをしたのです。

仏教の智慧は障をなくしてくれるものではありません。悩み苦しみがあるのは人間誰しものです。この苦難の人生で悩まない方がおかしいくらいです。それにとらわれ何かでなくそうとするのは、それこそ呪文で火を消そうとしているのと同じです。仮に修行で克服できるとしても何十年もの修行が必要なら人生は終わってしまいます。

そこに至り届けられた仏の智慧があるのです。私たちが馬鹿げたことに惑わされないようにと願って導いて下さる慈悲です。そのことを正しく受け止めるところに必ず癒しと励ましの気づきがあるはずです。 合掌

奏庵法座

日時
2月26日(金)
午前11時～

「真宗宗歌」
正信偈
法話

早島 理 師
北海道 大成寺住職
龍谷大学大学院教授
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

日増しに陽が長く強くなっ
てくるのを目や肌で感じる
嬉しい季節となってしまし
た。今月も「見舞いに…」
と言ってくれる親友に法話
をしていただきます。早島
先生のいつものお話の優し
さと窓越しの陽で暖かい法
座になることと楽しみです。
どうぞお参り下さい。



布施 (ダーナ)

浄土真宗の2月はダーナの月です。ダーナとは布施のことで、見返りを期待しない本来の意味の「旦那」という言葉の語源になっています。

日本では法事や葬儀に僧侶を招いた時にのみ布施をされることがほとんどで、このようなことが習慣化されてきたことが、一種の報酬のように捉えられるようになって意義をなくしてしまっているのは残念なことです。

世界には何兆円という寄付をされる方がおられます。我々庶民からすると、どうせその方にとっては痛くもない金額だろうと言うのは間違いです。寄付や布施はどんな金額でも同じ、本来の意義に添って行いまた受け取ってはじめて布施として完結するのです。

海外のお寺には寄付行為が根付いています。お寺が僧侶ではなく、メンバー(信徒)によって護持されるものだからかもしれませんが、お葬儀や法事には僧侶とお寺に別々に布施をします。その他にも「金婚式を迎えた」、「子供が結婚した」、「孫が生まれた」、「日本に行ってきた」など、色々なご縁に寄付を下さいます。

布施というのは、私たちができる「あまねく施す」という実践です。僧侶も布施をします。日々の中で誰かに何かをするという行いは、そのお互いに何か魂胆があったり、見返りを期待しない気持ちのいいものでありたいものです。

編集後記

アメリカが大統領選挙の年を迎えている。4年ごとの一連の「騒ぎ」には、その選挙戦を象徴する候補が記憶される。前回は「黒人初の大統領を生むか」でその通りになったが、今回は「女性初」を期待されるヒラリー女史をかき消すように、「暴言王」トランプ候補に注目が集まっている。■政治家の暴言が取沙汰されるのは日本も同じだが、トランプ氏と今問題になっている日本の政治家の発言に違いがあると言えば、同じ無知で浅はかで傲慢でも、有権者の気持ちを代弁しているか否かだろう。■「言葉の暴力」という表現があるように、時に言葉は人を傷つけ、問題を深刻化させ、争いも生む。かといって「行き届き過ぎる」言葉も好きではない。行き届きすぎた言葉には相手より自分を守ろうとする「したたかさ」を感じるからだ。それは今盛んに使われる「させていただく」という言葉の使い方に象徴されている。謙っているように見せて真実をごまかすのに使っていることが多い。■週刊誌の発刊60周年記念のその間の記事を特集しているのを読めば、昔の表現の方があっさり、きっぱりしていて、ニュースらしい公平さを感じ、どこか気持ちいい。妙な尊敬語もなく、おおらかで、当然それはその当時のアナウンサーにも言え、当時の日本人がそうだったことが分かる。それが今では、そうであってはいけない人までが詐欺師まがいの言い回しをするようになっていく。■漢字とひらがなが混じる日本語には独特の味わい方があったが、その日本語の良さが失われるにつれ、日本人の良さも変わろうとしている。言葉には人格が現れる。何でも正直に言えば誠実であるとは限らないし、それらしい言葉を散りばめただけの言葉には血が通わず、かえって軽くなる。本来「させていただく」は、「我を捨てた施し」を表現する言葉だ。「後ろめたさ」をごまかす言葉に使うのは間違いで、人格も歪んでくる。

Norimaru